『ミドゥルタウン』研究ノート

—訳者解説の追録として—

中村　八朗

はじめに

生来不器用な筆者が永い年月をかけてやっと『ミドゥルタウン』の翻訳を終えたのは本年（1990年）1月のことであったが、実は出版社の作戦をかわしきれず不本意な箇所を訳文中の処所方々に残したままの完了であった。訳者解説もあらかじめ与えられていたはずのスペースを執筆直前になって急にその半分以下に削減するよう要求されたのであった。したがって『ミドゥルタウン』について再びなにかを論じることを求められているこの小文では、スペースの制約がなかったら訳者解説で取り上げたであろうことを論じる予定にして一応文案を考えてみることとした。

しかし改めてそう考えてみると、論ずべきと思われるのはかなり多くの事柄に亙っている。その幾つかを挙げてみると、まず business class と working class はマルキシズムの場合との混同を避けるため、それぞれ業務階層、労務階層と訳したが、訳文中の２回目の調査の部分、つまり Transition に移った部分では、筆者は前後関係からはここでは実業階級、労働階級と訳した方が読者には分かり易いのではないかと思いながら翻訳を進めていた。これは解説で述べたように２回目の調査の時はリンドがかなりマルクスの影響を受けるようになっていたので無意識的に business classとworking classをマルキシズムの場合の階級区分にしたがって考えるようになっていたからであろう。また解説の最後で２回目の調査からさらに５０年の後に、T.Caplowを中心とした調査グループがミドゥルタウンの３回目の調査を実施していることにふれておきな

がら、その内容についてはまったく紹介しておかなかったことも気掛かりになっている。しかしここでもそれを取り上げる余裕に乏しいのであるが、重要と思われる一つの要点だけを挙げておくと、業務階層と労務階層の間の階層格差がリンド夫妻の調査の時代にはミドゥルタウン人の生活の諸事万端にあれほど明確に行き亙っていたのであるが、５０年の時代の流れとともにその格差はほとんど解消しているとのことである。そうとすると一つの社会の階層格差はその社会の経済成長のある段階で拡大するが、その段階を越えてさらに経済が成長する場合には逆に格差が縮小するのではないか、そうしてリンド夫妻は格差が最も拡大した時のアメリカの都市を調べたのではないかといった仮説も設定できそうである。この他に解説では書くべきことではないが、若い研究者の方達には、翻訳というものは、自分の研究テーマの追求にあたり、そのテーマに関する理解を深めることに役立つと思われる時を除いては、あまり手を染めるべきものではないという、年配者としての忠告も添えておきたいと考えられた。

文案検討中には触れたいこととしてこれ以外の点も頭に浮かんだのであるが、しかしこの小文自体もスペースの制約を受けているので、それらすべてを扱うのは不可能なようである。とするとここでも扱うことの範囲を絞らねばならないのであるが、絞るとすれば筆者としてはシカゴ学派と『ミドゥルタウン』の関係、あるいはシカゴ学派と『ミドゥルタウン』の違いといってもよいが、ここではそれを中心に検討するのが適切なように思われた。解説では『ミドゥルタウン』はアメリカ人を見ようとした研究であったのに対し、シカゴ学派は多民族の共住する都市で人間の本性をみることを問題意識としていた旨を言及しておいたが、それをここでさらに敷衍して筆者なりの見方を述べてみることが若い方々の研究心を多少は刺激できると推測したからである。

Ⅰ　シカゴ学派とhuman nature

本書の始めの部分で明記されているように、リンド夫妻が現地調査実施に際し手掛かりとした先行研究はWisslerとRivers による未開社会の人類学的研究であった。ところで調査は1924年1月から25年6月にかけて実施されたが、R.パ

ーク、E.バージェス編のThe Cityは1925年に発行されており、したがって収集したデータを整理分析しそれに基づいて執筆を進めていた間－出版されたのが1929年であり、印刷期間を除いても３年程度の期間－にはそれに接していたことも考えられる。もし接していたとすれば、冒頭に掲載されているパークの論文 " The City : Suggestions for The Investigation of Human Behavior in The Urban Environment " の書き出し部分でシカゴやニューヨークのような現代都市にも人類学的調査が行われてしかるべきと述べられている(p.3) のを知り、夫妻は自分達の考えたアプローチに改めて自信を得たと思われる。実はパークのこの論文は最初は A.J.S.の1916年3月号に発表されそれがThe City の巻頭論文として収録されたのであるが、もし夫妻が最初に発表された段階でこの論文を知っていたのであれば、『ミドゥルタウン』の調査を企画していた時点で既に夫妻はパークに影響を受けていたことも考えられる。それにもかかわらず、パーク、バージェスおよびこの二人に率いられたシカゴ学派の都市研究と『ミドゥルタウン』との間には、一方は人間の本性を、他方はアメリカをというように、基本的観察視点にかなりの隔たりを窺うことができる。これがさらに両方の延長線上でどのような違いを生じているかを知らねばならないが、それにはまずパークが人間性の本質 (human nature) について説いている点を検討してみる必要がある。彼は1929年にも都市に関する自己の理解を簡潔に述べた論文 "The City As A Social Laboratory" を発表しているが、上記論文とこれとを通じて浮かび上がってくる都市認識を検討してみると、そこでの最終の研究対象は都市の内部の個々人であり、都市自体の分析はこの個々人研究のための媒介作業だったのではないかと思わせる箇所が少なくない。

ここで都市自体の分析というのは、都市の内部の個々人を超越し、意識されているか否かを問わず、彼等をそれにしたがって動くようにさせている都市のメカニズムの析出といったことであるが、ただしパークがそれを最終目的とする研究方向に無関心であったとは言い切れない。例えば symbiosis, competitive cooperation, dominance, succsessionといった概念で装備された human ecology という新たな研究分野の開拓を提唱していた時、彼の関心は都市自体の分析に向けられていたと見ることができる。(human ecologyは間もなく激しい批判にさらされるようになったことから、現在は日本の都市社会学者からも

ほとんど顧みられなくなっているが、筆者個人としてはこれを新たな形で継承再生させることを都市社会学の重要課題と考え、この方向にそった研究として現代の東京と明治から戦前期までの日本の都市成長との分析を試みたことがある。ただしここではその点に付いては一切取り上げないことにする。)

しかしecology の次元を越えたところに成り立っている別の次元、つまり文化または社会の次元で都市を論ずる場合、彼はそこでは内部の個々人が部族社会や農村社会の伝統と慣習から解放されて思考と行動の自由を得るようになり、その自由は市場、貨幣制度、交易手段とさらに分業の発達およびnatural areaの成立によって一層増進されることを再三強調する。したがってそのような都市では個々人はそれぞれが備えている人間性の本質を遺憾なく発揮した行動をとり得ることになるがそれはどのような形の行動か、また個々人がそのように行動する場合どのような集団や社会的諸制度が現れるのか、これらのことを十分に観察できる以上、都市は社会学には格好の実験室になる、というのがパークの論旨であるように思われる。そうとすると、実験室の中である実験を試みる研究者には、実験室自体は研究の対象になっていないことを考えれば、上で述べたように彼にとっての最終的研究対象は都市自体ではなく、その中での人間性の本質を発揮した行動であったと言えることになる。

ここで上記の「人間の本性」という用語、つまりパークの言う“human nature”に対して筆者が『ミドゥルタウン』の訳者解説の中で用いた訳語について、出版社にせかされるあまり十分な配慮を欠いたことを認めておかねばならない。というのは、パークの論旨は、人間は多種多様な思考と行動の可能性を備えているが、部族社会や村落社会では伝統や慣習に基づく集団的規制によりそれが潜在的状態に押し留められているのに対し、そのような規制から解放された都市ではこれらの可能性が一斉に開花する、と言い換えることができるようであり、そうとすれば彼が“human nature”という言葉を用いた場合に言いたかったことには、「人間の可能性」と訳した方がより適切であった思うようになっているからである。したがって以下の部分ではこの訳語を用いることとする。

都市研究に認めていた意義がこのように人間の可能性の探索にあったとすると、それは必然的にある一つの方向への研究の傾斜を招くようである。という

のは都市、特に大都市では人間の可能性が開花するという前提に基づくとすれば、村落社会や小規模の地域社会では人間にはそんなことができるとは夢にも思われていなかった行動、逆に言えば都市で初めて現れる行動、それも特に大都市にのみ起きている行動だけに研究の対象を絞る傾向が生ずると思われるからである。確かに都市ではそのような行動が大写しになって映しだされ、それが都市の象徴と感じられ、時にはそれが都市の魅力にもなっている。「小さい地域社会は型破りの行動を時に黙認するに止まるが、都市はその行動に賛美をもって報いている」と述べたパークは、この点にわれわれの注意を喚起したのであった。もちろんその行動には良いものも悪いものもあり、あるいは初めは悪と見られたものがのちに良いものに変わることもあろう。とにかく善悪のいかんにかかわらず、従来の常識の範囲を遙かに越えた行動に都市研究の焦点が当てられることになるが、反面常識の範囲に納まっていると見られた行動は既に分かり切ったこととして研究の対象から除外されることになる。

ところで常識の範囲を越える行動の顕現を一層推進するのは上で挙げたように分業の発達とnatural areaの成立であり、前者の結果として生まれたある種の職業（例えば taxi-dancer や waitress ）では従来は予想もされなかった行動が取られており、 そこに新たな人間の可能性が展開されている。 後者のnatural areaとは特定のタイプの行動を取る人間が自然発生的にそこに集まってくることから形成されるに至った一つの特徴を持つ地域であるが、都市の内部に一旦この地域が形成されれば、地域の内部の人間の行動が都市全体の社会規範からは隔離されるので彼等の行動は一層その独自性を強化させていく。パークに指導された研究者が、それぞれの特色を持つ職業とnatural areaに注目し、単身居住者、hobo, gang, ghettoなど、恐らく一般の多くのシカゴ人が異常と感じ、その存在だけは知っているとしても内情の詳細がまったく分かっていなかった対象を取り上げたのは都市にhuman natureを見ようとした立場が導いた必然的結果であったと考えられよう。最近『「族」たちの戦後史』（馬淵公介著　三省堂　1989年10月）という、太陽族、みゆき族、原宿族、暴走族などを扱った書物が出版されたが、パークの立場からはこれは彼の意図に非常によく叶った対象を取り上げていることになるのであろう。そうしてこのような対象に関する研究成果が書物として刊行された場合、読者は未知の世界を初め

て知り得た満足を感じることになる。ここには日本で一時現れた異境ブームに共通する点もあったのではなかろうか。

一方アメリカ人を見ようとした『ミドゥルタウン』の場合、リンド夫妻は調査地の選択に当っても特異性を持っていない人口３万８千の小都市を選び、さらに小数の黒人住民は研究対象から除外した上で、観察の対象としては恐らく当時のアメリカ人が等しく経験しているであろう行動を取り上げてアメリカの平均像に迫ろうとしたのであった。等しく経験している行動であるとすれば、それは日常の極めて当り前と思われていること、さらに言い換えるなら正常と思われている行動に焦点を当てていたことになる。ただ夫妻の分析が極めて鋭利であったところから、著書として刊行された『ミドゥルタウン』に接した読者はその中に自分でも気の付かなかった自分自身を改めて発見し、また自分の感じる喜びと悲しみが自分だけのものではなくアメリカのすべての人々に共通のものであると知って強い感銘を受けたのであろう。ただし『ミドゥルタウン』にも型破りの行動がまったく現れていないわけではない。少数の急進主義者、芸術家肌の人間、特異な才能の持ち主が住民の中に含まれているのであるが、しかし彼等は自由な行動を抑圧されることが多いのでその抑圧からの解放を求めて大都市に転出する傾向にあると書かれており<訳書319頁および335-6頁，注(63)>、これは逆に大都市ではそのような人々が喜んで迎えられるとするパークの説と符合することになる。しかし『ミドゥルタウン』では型破りは完全に例外的存在であり、ただ断片的に触れられているに過ぎない。

II　正常人口と異常人口

さてここまで述べてくれば、日本の都市社会学にある程度通じている方は、鈴木栄太郎の提起した「正常人口の正常生活」と「異常人口の異常生活」という概念を思い浮かべられることであろう。すでにお分かりのようにこの対比する二つの概念に照らした場合、シカゴ学派は異常人口の異常生活を、『ミドゥルタウン』は正常人口の正常生活を扱ったことになる。シカゴ学派が異常に傾斜したのは、先に述べたようにパークの立論の趣旨からの当然の論理的帰結と

言い得るのであるが、同時にその調査地が人口３００万のシカゴであったことも考え合わせねばならないであろう。加えてこの人口数だけでなく、シカゴが多くの異なった人種の入り混じった都市であったことにも注意を払う必要がある。パークは彼の行論展開の第一段階で都市における伝統や慣習の消滅を説いたが、消滅の程度はこのようなmulti-ethnic city では特に顕著であったと思われる。逆にそのようなシカゴを常に眺めており、さらにこれも彼の限界であった「個々の都市は相互に極めて類似しているので、多少の保留を要するとしても、一つの都市について知り得たことは他の諸都市にもあてはまると見ることができる」という想定に立っていたところから、都市一般に関する認識においても伝統や慣習の消滅を特に重視して、それを理論構成の出発点にしたのではなかろうか。シカゴ学派の都市理論が後に数々の反証データを提示され、多くの批判（ただしここでは、自分たちこそイデオロギー的でありながら、逆にシカゴ学派をイデオロギー的としたnew urban sociology のグループによる批判は除外して考えている）にさらされたのは、この出発点にも起因していたと考えられる。

シカゴ学派の辿った後の推移は別として、都市の研究において正常部分を見るべきか異常部分を見るべきかは、議論の対立を生み出す点であろう。鈴木栄太郎は正常部分に都市の本質を認めたのであるが、『ミドゥルタウン』にあつても異常が少数の例外に過ぎなかったとすれば、鈴木の立場はここでも妥当と見なされる。ただしシカゴのように多民族を呼び込んで急速に発展した大都市では異常部分が大きく膨れ上がり、むしろそこにこそシカゴの都市としての象徴が感じられるようになっているとすると、それを都市の本質とは無縁なものとして簡単に切り捨てられるか否かが問題になってくる。したがってパークの指導の下に当時のシカゴ学派研究者が実態調査では異常部分をインテンシィブに取り上げたのも肯けないわけではない。しかし当時のシカゴは異常部分がいたるところで蔓延しそのため正常部分はそれにまったく圧倒されていたのだろうか。

これもThe Cityに掲載されているバーヂェスの有名な同心円説の論文に照らした場合、異常部分が蔓延していたのはほとんど第２地帯すなわち遷移地帯に限られていたのであり、シカゴ学派の調査地点も大体がその内部であった。第

3の労働者住宅地帯、第4の一般住宅地帯、第5の通勤者地帯はパークの言うhuman natureの認識を問題意識とした研究の中ではほとんど注意が向けられなかったのであるが、おそらくこれらの地帯では正常生活が支配的であったのではなかろうか。またバーヂェスは各地帯別の人口数の比率についてはまったく触れていないのであるが、正常人口の正常生活が支配的であったと思われる地域の人口数は遷移地帯のそれよりはかなり多かったのではなかろうか。たしかにシカゴの社会問題は殆どが遷移地帯に集約して現れており、そのためそこを人間の可能性を探り出す格好の場と見て研究関心を集中させたのであろうが、反面その地帯で観察されたことのみが都市のすべてと速断し、実は大多数のシカゴ人は正常人口として正常生活を営んでいたのを失念するという結果に陥っていたのではなかろうか。『ミドゥルタウン』やシカゴ学派の時代から約三十年を経た頃、M.シュタインはその間に現れた都市の地域社会研究の推移について、以前は専らスラムに向けられていた研究者の目が、現在では近郊に移っていると指摘したのであるが、それは研究対象が異常人口から正常人口に変わったという意味にも理解できるであろう。

『ミドゥルタウン』、シカゴ学派およびアメリカにおけるその後の都市社会学研究は、鈴木栄太郎流の正常人口と異常人口の概念に照らしてみると、以上のように関連づけられるのであるが、上でも触れたように、重点を正常、異常の何れにおくべきかはしかるべき検討を要する点と思われる。中小都市であれば異常人口は存在したとしても、かなり例外的なものに過ぎないであろう。パークは上記のように人間の可能性の開花をとくに可能にする契機、これまでの行論の展開に沿って換言すれば 異常人口の発生を促進する契機として 分業とnatural areaに注目したが、小都市のミドゥルタウンでも分業は十分に進んでおり、そのためにリンド夫妻に労務、業務という階層分化に着目させるほどではあったが、しかし異常と感じさせるほどのタイプの職業までは生むに至っていなかった。また型破りの人達がそこに集まって住み着くことで型破りの行動を一層徹底できるnatural areaも形成されてはいなかった。このような都市では研究者が正常人口のみを扱うのは当然のことと考えられよう。（機械生産の導入にともなう職業生活の影響は認められても、natural areaが形成されていてそれが内部の居住者に特に影響を及ぼすことがなかったところから、M.シュ

タインは『ミドゥルタウン』で扱われたのは都市化ではなく工業化であると説いたのであろう。しかし機械生産がさらに発達し、それが商業活動や金融活動を刺激して大量の人口流入を招き、その内には少なからぬethnic groupが含まれていれば、シカゴと同様なnatural areaも発生するであろう。そうなった段階では都市化を扱わねばならないことになる。)

ただし問題意識いかんによっては、その例外的存在に重要な意味を見いだし、それに焦点を当てることもあり得ないわけではないと思われる。例えば『ミドゥルタウン』の場合でいえば、まったく除外された黒人住民を意識的に取り上げ、小都市におけるマイノリティの特殊性に照明を当てるといった研究もあり得たと思われる。大都市ではそのような特殊な問題意識を抱かないとしても異常人口は中小都市よりはその比率が高くなり、この点からだけでも上記のように簡単に切り捨てることに抵抗が感じられるであろう。たとえこの人口が正常人口よりは遥かに少ないと批判されるとしても、それに対しては、数は少ないとはいえ、その都市の社会問題としては、あるいはその都市の住民の生活や文化の将来を卜する上では、極めて重要な意義を持つといった反論の起きることも考えられる。

あるいは別の反論として、正常人口というのが住民の平均値を意味するのであれば、都市の本質はそのような平均値を通じてではなく、むしろ最も象徴的または典型的に都市的なタイプの人達による最も都市的な生活を通じてのみ把握できるのであり、この理念型とも言えるタイプの人達が平均値から隔たっているというので異常人口の内に含めるのであれば、都市の研究では異常人口にこそ焦点を当てるべきであると説くことも可能であり、この反論にも正当性が認められないわけではない。パークの場合は人間の可能性の探求にあたり自明と思われるものは研究の対象から外したことから異常人口の方に関心が傾斜した点についてはすでに述べた通りである。(もっと根本的には正常と異常という区分設定に対する異議申し立ても可能であろう。しかしこれは果てしない論争に導き、最後はフーコーにもお出まし願うことになりそうに思われるので、ここでは単に常識的な正常、異常の区分で我慢していただきたい。)

Ⅲ　異常人口と研究姿勢

異常人口を扱うことには、以上の他にも、例えば少数とはいえ放置できない都市問題になっているからといった理由などが主張できるであろう。そうであれば異常人口を扱う研究には十分な意義が認められることになるが、ただし次の点に注意が必要と思われる。先ず異常人口を通じて最も典型的な都市生活とか都市的行動様式が把握できるという立場を取るとしても、その調査結果をいつしか都市人の平均像として一般化してしまう恐れが考えられる。今日になって振り返ればシカゴ学派はこの恐れにまったく無警戒なままに一般化を試みてしまったようであり、そのため後に研究者の関心が近郊の正常人口に向けられるようになってからは、試みられた一般化が大巾な修正を求められることになったと言える。（近郊地域の研究のさらに後になってからは、再び都市の内部地域に関心が戻り、現在はinner cityの研究が一つの潮流となっている。ただし、パークの説いた人間の可能性の検出という動機は問題意識からは消滅しており、inner cityで進行するurban decay に今日の都市の最も深刻な問題状況が現れているとする認識が基本的動機になっているようである。日本でもこれに倣ってinner cityを扱う動きが見られるが、日本の都市では内部に多少の問題があるとしても欧米の都市の場合の極端なdecay とは比ぶべくもないことを考えると、かなり軽率な動きであるように感じられる。日本ではinner city以外に遙かに厄介な都市の問題を抱えているはずである。）

次に挙げられる点は、異常人口に焦点が絞られている間は、都市の社会問題は異常人口に集約されており、したがって正常人口にはどのような問題も起きていないと見てしまう傾向である。しかし質と量に違いはあるとしても、問題は正常人口の側にも少なからず起きており、それを明らかにしたのが『ミドゥルタウン』であった。この研究の調査地として選ばれたインディアナ州マンシーは型破りの人間には窒息しそうな人口３万８千に過ぎない小都市であり、多くの工場を擁していたとはいえ一般には牧歌的生活も予想されていたのであろう。しかし「訳者解説」で触れたように、当時アメリカ社会を席巻していた機械生産はこんな小都市にも及んでおり、それから波及する問題は特に労務階層に重苦しくのし掛かっていた。『ミドゥルタウン』の中ではしばしば1890年と

調査時点の1924年が比較されているが、この比較によれば牧歌的生活はすでに過去のものとなっていた。

異常人口を扱う場合に考えられるさらに別の問題は研究者側の姿勢に関する点である。パークに指導を受けたシカゴ大学の若手研究者はそれぞれにシカゴのような大都市でなければ現れなかったようなタイプの職業や地域の調査に取り組んで次々に優れた成果を発表した。その調査自体は多くの苦心を要したものであり、たとえばNels Anderson は日雇い労働の浮浪者hoboの調査のために自らその仲間に加わり、 taxi-dance hallを扱った Paul C. Gressy は最初は hall の支配人に調査を拒否されたので、 研究仲間を募って銘々が客を装って taxi-dancerに接触した。 居住者の一人一人が自分の借部屋で完全に孤立した生活を営み、自殺率もたかい rooming-house district の研究で 、Harvey W. Zorbaugh は捕まえづらいこれら居住者との接触に苦心し、 その上でかれらから多くのlife historyを聴き出している。したがってその研究成果には普通では知ることのできない内情がふんだんに盛り込まれており、書かれたありのままの事実だけでも読者の興味を十分に喚起することができる。つまり、報告された事実自体がそれだけの力を持っていたことになる。

このようにありのままの事実が読者に訴える力を持つ場合、研究者はたえず一つの危険に向かい合っている。というのは事実をありのままに、できればさらにヴィヴィッドに伝えるにはそれなりの文章力や表現上の苦心を要するのではあるが、しかしそれ以上に研究者の透徹した観察力とか鋭い分析が加えられないとしても、事実自体の力により研究結果はそれなりの評価を受けることになる。そのため研究者はfact-findingの段階で満足し、それ以上に事実を深く見据えようとする厳しい姿勢の必要を感じないことになる。すでに述べたようにパークに human nature の問題意識のあったことからシカゴ学派は異常人口の研究に傾斜したと思われるが、そうなった場合はこの危険を絶えず自らに言い聞かすべきであった。異常人口を扱いながら、それをいつしか正常人口と混同する恐れのあったことにシカゴ学派が無警戒であったと上で述べておいたが、加えてここで挙げた危険、つまりfact-findingで満足してしまう危険に対しても、筆者の乏しい渉猟の範囲で見る限りではあまり十分な注意は払われていなかったように思われる。

Ⅳ 『ミドゥルタウン』の研究姿勢

訳者解説の中で筆者は、日本の都市を研究する場合、シカゴ学派よりは『ミドゥルタウン』が先行研究として意識されるべきであったと述べておいた。パークに指導された個々の研究者の扱った対象のすべてではないとしてもかなり多くがethnic groupであった。またethnic groupではない場合でも、さまざまのethnic groupを抱え込むようになって社会的混乱が著しい大都市であったシカゴならではと思わせる対象であった。ethnic group以外に対象となった例として上で触れたZorbaughの扱ったrooming-house districtの居住者の場合についていえば、いかに居住地では孤独であるとしても、日本であれば職場で友人ができるはずであり、したがって居住地の条件でだけで自殺にまで追いつめられることはまずはあり得ないと思われる。日本の都市は少なくとも現在までに関して言えばこのような混乱にあまりひどくは見舞われていないとすれば、少数の黒人人口も除外して正常人口を扱った『ミドゥルタウン』の方を意識して然るべきと考えたのであるが、ただし『ミドゥルタウン』といえども日本の都市との間には隔たりがないわけではない。たとえば混住社会といわれ階層の違いによる棲み分けが明確でなく、さらに集団主義的文化が貫徹していると思われる日本では、『ミドゥルタウン』の場合のように業務階層と労務階層が観察者にはっきり分かるように相互に全く切り離された生活を営んでおり、通う教会も別々ということはあり得ないのではなかろうか。（ここで国別の相違にまで視野を広げたからといって、都市の動きや諸現象を全て国家の介入と為政者の政策決定に還元させて説明しようとする一部の研究者の主張に同意するものではない。そもそも社会学は国家とは別の次元として社会の存在を意識したところにその成立の起源が認められており、そのように説明できるとすれば、都市の社会学的研究はありえないことになる。実際はこの主張の逆であり、都市には都市固有のdynamismが生じているので世界の至るところで国家も為政者も都市には手を焼いている状況を知っておく必要がある。この小文ではシカゴ学派がやや否定的に論じられているが、都市の動きは人為的に簡単に操作できる

ものではないという認識がこの学派、とくにパーチェスにあったことは強調しておくべきであろう。）このような点には十分の配慮が必要であるが、ただし「訳者解説」で述べたように、機械生産の浸透にともなって地域生活の正常人口に生じた多種多様な変化については日本だけでなく他の国の場合でもかなり共通する面があるように思われる。

ところで扱われている事柄がこのように共通性をもつとすれば、正常人口の全てがそれらの事柄を経験し、言われなくてもよく知っていることになる。調査報告の読者も恐らくほとんどが正常人口に属するのであろうが、そうすると調査者の観察力や分析力いかんによっては報告書は極めて当り前なことを全く平板な形で書き並べてあるだけの退屈なしろものに終わる恐れがある。異常人口のことが扱われている場合であれば、報告される事実が読者には未知のものであるだけに、調査によって知りえたことを羅列するだけでも一応読者の興味をそそることになろう。調査者の観察力と分析力の不足はそれによってある程度カバーされる。他方正常人口の扱われる場合は、事実そのままでは読者にはなんら魅力を感じさせない。それにもかかわらず調査結果を読者に興味のある報告書として提出しようとすれば、研究者の透徹した観察力と鋭い分析力が欠かせないことになる。『ミドゥルタウン』がロング・セラーとして現在も刊行されていることについてはこの点に一つの理由が見いだせるであろう。逆にシカゴ学派の場合は、取り上げたのが読者には未知のものであっただけに、そのような事実自体のもつ力に頼り過ぎ、それが後の衰退を招いたのではなかろうか。

『ミドゥルタウン』について言うことができる以上の点と関連するのが、リンド夫妻の調査法（訳書 249-258頁）である。1924年1月から翌年6月までかけた1年半に及ぶ調査地滞在期間中、「ある晩は大手の製造工場の工場長と、次の晩には労働組合のリーダーか日雇い労働者と夕食を共にした」（同 251頁）とその覚書に書かれているようにじつに丹念な聴き取り調査が続けられたのであった。さらに1890年に遡る現地発行の新聞とか保存された日記類の収集と検討に加えて質問紙法調査も試みるといったようにありとあらゆる情報源への接近が図られている。透徹した観察力と鋭い分析は、一つには『ミドゥルタウン』の原書の各頁にふんだんに書き込まれており筆者の翻訳では大部分を省略せざ

るを得なかった多くの注から推察できるリンド夫妻の広い学識に基づくのであろうが、それと並んでのような調査法により調査地の住民の生活と意識のすみずみまでを知り尽したことにもよるのであろう。

『ミドゥルタウン』に強いて欠陥を捜すとすれば、まずミドゥルタウンをあたかも一つの完結した小宇宙であるかのように扱い外部社会との関係が十分には検討されていない点が挙げられるが、しかしそれ以上の問題は全体を見渡した結論を下すことを放棄していることである。とはいえこの書物の随所にリンド夫妻の鋭い観察を見いだすことができる。それをここに要約することは不可能であり、読者みずから全体を読み通してお知りいただかねばならないが、ただここで極く一部として始めの方の生活費獲得を扱ってある部分から例をあげると、物品購入が以前のような　現金ではなく、ほとんどを信用に基づくローンで行うようになってからは、信用の低下を恐れて人々の行動が一定の枠の中に収まってしまいそれをはみ出すことがまれ（今日の用語で言えば 同調行動）になっており、また機械の導入にともなって長い年月を掛けた熟練が不要になり、代わって機械のスピードに耐える体力が求められるようになったので、労働者は賃金以外に自分の仕事に対する意義を見いだせなくなったばかりでなく、45歳で離職の不安に怯えている。特にわがことではないかとハッさせられるのは、ミドゥルタウンの就業者全体が常に上昇していく生活水準に追いつく収入を得ることだけのために働いており、それ以外に何の目的も感じないままに、ただそこに仕事があるからと毎日の労働に精をだしており、それはあたかもカード遊びに夢中になっている子供にも等しいと指摘している下り（第８章）である。このような観察は『ミドゥルタウン』の調査法無くしてはあり得なかったと思われる。

ここで断っておかねばならないのは、シカゴ学派も『ミドゥルタウン』の場合に似て、その調査法は参与観察や個人的文書記録（personal document）の利用を中心としていたことである。ただ上で述べた異常人口を対象とする場合の注意に欠けたところからその調査法を十分活用せず、fact-findingの段階を越えてさらに深い掘り下げは試みられなかったのであった。したがってリンド夫妻の調査法をそのまま踏襲すれば必ず観察力が養われるとは保証できないことになり、fact-findingだけに満足してしまうとか、あるいは宝の山を前にし

ながら先入観や固定観念にがんじがらめのままになっていては、得られるべき成果も得られない結果になる。つまりこの調査法はそれだけで十分条件とはいえないことになるが、しかしそれは必要条件にはなっているのであり、観察力錬磨のためにはまずは試みられねばならない研究過程であろう。

V　調査法と観察力の錬磨

ところで社会学はシカゴ学派や『ミドゥルタウン』の時代を経た後は、パースンズ流の一般理論、ランドバークがその典型であった自然科学モデル、統計的手法による大量観察に傾斜するようになり、この調査方法に対する関心はいつしか希薄になったようである。たしかに理論化、客観性、一般性などの点についてはこの調査方法が一時は行き詰まりの状態に陥り、この状態に対する批判は一度は現れずには済まなかったとも考えられる。しかし逆に一般理論、自然科学的モデル、大量観察の側にも問題があると感じられるようになったところから最近は流れが再び逆転し、symbolic interactionism や現象学的社会学など行為者の主観的意識の理解の方に強い関心が寄せられている。この他に構造主義への関心も起きているが、これは主観的意識のさらに背後を探り、そこで主観的意識に作用している要因をつきとめようとしているようである。この両者は社会学が一旦は背を向けた哲学と握手することを求める動きともなっているが、さらにその一方では社会史に倣おうとする動きも現れ、社会学は諸派相い乱れて互いに覇を競う様相を呈している。

このような潮流の変化の中で若手の方はどの流れと肩を組むべきかについて絶えず腐心されているのではないかと推察されるが、しかしどれと肩を組もうともそれによって進めた自分の研究結果が皮相な認識に終わっては何もならないことを十分知っておくことが必要である。例えば、Weber の方法論的個人主義をいかに忠実に踏襲したとしても、研究者の洞察力や観察眼が劣っていては、得られた成果は踏襲しないよりはましであったとしてもWeber の研究とは似ても似つかないものになってしまうであろう。この洞察力や観察眼は一部は先天的なもののようであるが、これを訓練によって磨くとすれば、『ミドゥルタウ

ン』でリンド夫妻の行った参与観察が極めて適切な方法の一つと思われる。あるいはここで夫妻は質問紙法も試みたではないかと反論される方もあると思われるが、しかしそれは補助的手段に留まっていたことを知っておく必要がある。

以上のように述べてきたからといって別に筆者自身が洞察力や観察力に優れているというわけではない。ただ、多少でも他の方の研究と違った成果が得られたとすれば、足を使った研究が大切なのだと信じて聴き取り調査に精を出した時期のあったことによるようである。残念ながら日本では大学に職を奉じる社会学者が一年半も調査地に住み込んで調査をするのは不可能であるが、少しでもそれに近い方法は足を棒にして関係者を次々に訪ねて個人的に聴き取りを行うことである。大量観察が一般的になってからは、調査地での事前の聴き取りは全く省略して調査票をつくりはじめ、できあがったらすぐ現地でサンプルにばら撒くことが当り前になっていた。それでも統計的有意差程度のことが出てこないわけではないとしても、大切なことはなにも掘り起こされてはいなかったのではなかろうか。逆にいえば有意差が出ればそれで研究が完成したと安心してしまってそれ以上に対象深く迫ろうとする姿勢を放棄してはいなかっただろうか。現地に出掛ける前に一応は自信をもって予め設定してみた枠組が聴き取りを始めてみてそれが調査地の実情には無関係と知り、しばらくは途方にくれるといった経験を何度か味わった筆者にはそのことがとくに強く感じられるのである。

筆者が行った足でする研究は恩師の厳しいしつけによるところも少なくはなかったのであるが、実はその前に『ミドゥルタウン』にも影響されていたからであった。大学の学部学生として社会学を学ぶようになって最初に読んだ原書が『ミドゥルタウン』だったのであるが、最初に読んだだけにそれから受けた印象も強く、豊富に引用されている労務層の人々やその家庭主婦の談話に接し、調査とはこのような談話を現地で聴き取ってくることかと感じたのであった。しかし当時の日本の社会学では調査といえば回答が予め定めれた選択肢のどれかを選ぶだけということになる調査票をばら撒き、後はどの選択が多かったか少なかったかを集計するだけであることを間もなく知った時は、それはそれできれいに整理はできるとしても、人間の現実の意識を綾取っている複雑なニュアンスが一切無視されているような味気無さを感じたのであった。筆者の研究

生活の初期に行った町内会の調査ではこのような『ミドゥルタウン』から得た印象を絶えず念頭に置いていた。とはいえ後には無反省なままに大量観察の流れに身を投じたのであるが、しかし若い方々も一度は『ミドゥルタウン』に近付く努力をされてよいのではないか、それによって調査票だけに頼っていた時には全く気付かなかった社会生活や社会意識の奥底のようなものが多少は分かってくるようになり、ただ調査票をばら撒くというだけでは、まして机上の研究だけではなおさら身につかない観察力と分析力の練磨に役立つのではなかろうか。このような練磨を経ない間は、いかに多く本を読んでもただその本に読まれてしまうといったことにもなりかねない。

おわりに

以上『ミドゥルタウン』で採用された調査法について、それが観察力と分析力の錬磨に寄与することを述べてきたが、しかし今日はそれを別の面からも見直すべき状況になっているようである。というのはこの調査法は、一旦は傾斜したはずの一般理論や自然科学的モデルによる大量観察から再び距離を置くようになったと上で述べた新たな研究動向には個人の再発見に努める傾向がうかがわれることと 関係するからである。 この傾向を最も端的に現すものとしてnarrative storyや personal document のみを対象とする研究が現れており、それは個人がそれぞれに自律性を持つことを主張しているようである。しかしwatson流の行動主義心理学が科学性を標ぼうして外部から観察可能な行動のみを対象としたことから心理無き心理学に陥ったことにも似て、個人の自律性のみを説くだけでは社会無き社会学になる恐れが感じられる。とはいえ、個人を軽視して早急な一般化を求めそのため皮相な結論に甘んじようとしていたこれまでの傾向に対する歯止めとして一度は辿らねばならない研究過程なのであろう。ただしnarrative story とpersonal document のみに対象を限定する必要もないと思われるが、要は『ミドゥルタウン』がそうであったように社会の個々人の生活と意識のすみずみまで知り尽くそうとする試み、さらに進んではそれらの背後にあってそれらを揺り動かしているもの、それは調査対象とされた

個々人も指摘されるまでは気付かなかったようなものまでも掘り出そうとする努力が現在改めて要請されているのであろう。その要請に応えるためにも『ミドゥルタウン』の調査法をここで再認識し、上でふれた国と時代の違いを考慮した上でそれを今日の研究に生かそうとする試みがあってしかるべきではないかと考えられる。もちろん、類似した調査法をとりながらもfact-findingの域をほとんど出られなかったシカゴ学派の轍を踏むことには絶えず注意する必要のあることは断るまでもない。

（なかむら　はちろう／茨城大学）

＝ 編集付記 ＝

本号の小特集「『ミドゥルタウン』の今日的意義」は、本年５月５日に取り行なわれた筑波社会学会大会の特別企画シンポジウム「『ミドゥルタウン』の今日的意義－邦訳刊行によせて－」を受けて企画されたものである。当日の登壇者である三方に御寄稿頂いた。このシンポジウムは、本会の会員である中村八朗教授が心血を注いで翻訳の労に当たられていたリンドの『ミドゥルタウン』（青木書店）が今春刊行されたことを記念し、日本の社会学の今後に対するこの訳書の価値を展望するために開かれたものである。当日は３０人近くの聴衆があり、フロアを交えた活発な議論がほぼ３時間にわたってなされた。事務局ではこの貴重な成果をさらに生かし発展させたいと考え、本小特集を企画した。町村・韓両氏の論考は当日の報告を発展させたものであり、中村教授の論考は訳者解説の補遺として新しく書き起こされたものである。訳書とともに読まれることを希望する。最後に、急な原稿執筆依頼にもかかわらず、力作を寄せて下さった三方に重ねてあつく御礼申し上げたい。

（編集委員会）